季刊 トライホークス

TRI HAWKS Quarterly Issue vol.68 / 2022

68

ジブリ美術館は三鷹市立の美術館でもあり、市内のイベントにも様々な形で参加してきました。みたか商工祭り、阿波踊り、みたか太陽系ウォーク、三鷹の森フェスティバル、市民駅伝……、コロナ禍で自粛続きだったイベントが、今年に入って少しずつ動き始めています。ちなみに図書閲覧室の名前は「トライホークス（TRI HAWKS）」。「トライ」は「3」、「ホークス」は「鷹」で、「三鷹」の意味を持っています。

夏の阿波踊りや秋の駅伝大会、メンバーはどうするか、練習のやり方や参加の仕方はどうするか、今年はそんな話題が季節ごとに出てきました。昨年まではやむなく中止が多かったことを考えれば、規模を縮小したり、やり方も変わったりしていますが、参加するスタッフは楽しそうで、活気を感じます。少しずつ行動範囲が広がって、様々なものが動くことで、新たな交流も生まれると思います。コロナ禍の影響はまだ続くとは思いますが、まずは再び地元のイベントに参加できる日常を嬉しく思います。

季刊トライホークス　2022年 | 68号
発行日……2022年9月3日 | 発行人……中島清文
発行所……徳間記念アニメーション文化財団
東京都三鷹市下連雀1-1-83　三鷹の森ジブリ美術館
編　集……石光紀子　鈴木智子 | デザイン……川島弘世
印　刷……図書印刷株式会社 | 非売品

本棚より

トライホークスに置かれているおすすめの本を紹介していきます。
トライホークスの本棚の中の一冊から、みなさんの本棚の一冊にしていただけたら嬉しいです。

少年

この本は『チョコレート工場の秘密』や『魔女がいっぱい』の作者ロアルド・ダールの自伝です。彼自身の生誕から始まり、主に書かれているのは6歳から20歳までのこと。1916年生まれなので6歳の時は1922年。今からちょうど100年前のことです。9歳からイングランドの寄宿学校に入るのですが、そこにいたのは、いばり散らす上級生をはじめ、権力を行使し、ムチを振りまわす先生たちでした。大人のうそも本当もしっかり見抜いて、ほとんどの大人を危険な生き物と認定しているダール少年。無実の罪でムチ打ちされたり、先生に対抗して生徒同士が結束を深めたり……、学校生活はなかなかに大変です。

その他、ノルウェーでの夏休みや麻酔や鎮痛剤のないケガの治療など、楽しくゆかいな思い出はさらに楽しく、辛く嫌な思い出もユーモアを交えておもしろく、写真や手紙とともに紹介されています。

寄宿学校を出ると、大学へは行かずシェル石油で働き始めます。念願かなってアフリカ赴任が決まってからのことは『少年』の続編となる『単独飛行』に書かれています。この2冊は宮崎駿監督が図書室に置くおすすめの本として選びました。『単独飛行』（永井淳訳 早川書房 重版未定）の解説で宮崎監督は「こういう人生が本当にあるんだと、ひたすらに驚嘆してしまいます。」と、戦争の時代の生き方や強さというものに触れ、ダール本人のことや作品について語っています。

今回『少年』が新訳版として登場したので、改めてご紹介したいと思いました。『少年』と『単独飛行』、ぜひ2冊続けて読まれることをおすすめいたします。

少年［新訳版］
著者…
ロアルド・ダール
訳…田口俊樹
ハヤカワ文庫
1,364円

角野栄子

Eiko Kadono

時をあべこべにして

図書室でも人気の『魔女の宅急便』。今回は作者である角野栄子さんに心に強く残っている本を紹介していただきました。選ばれた本は全部で11冊。図書室と同じ本が選ばれていると嬉しくなり、新しい本との出会いも楽しみが増えて嬉しくなります。「児童書」とよく言われますが、決して子どもたちだけのものではなく、大人になっても楽しめる、心動かされる本がたくさんあると改めて思いました。

©講談社写真部

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

本についての初めての記憶は……？　と考えると、幼いころのいたずら書きを思い出す。太平洋戦争直前、子どもが読めるような本はわずかしかなかった。だから、鉛筆をにぎり、藁半紙（ザラザラな粗末な紙）に、絵や、絵まがいのものを、いつも自分で描いていた。あるいは、ロウ石を握って、当時はめずらしかったアスファルトの道をさがして、路上に絵を描いた。まず、道を描くことから始まって、両側にお店屋さんや、電信柱や、踏切を描いて、想像の町をどんどんつくっていった。そこにどんな人がいるか、この先のずっと向こうはどんな町か……など思い浮かべながら、ぶつぶつ何かをつぶやきながら。しゃがみ込んで、夢中で描いて、足が痛くなったら、ペタンと道に座り込んで描いた。心はすっかり別の世界にはいりこんでいた。今思いかえすと、小さなお話を自分で自分に語っていたのかもしれない。

父が幼い子どもたちに話をしてくれることもあった。それが大方子ども向けではない、「ああ無情」（レ・ミゼラブル）だとか、「宮本武蔵」やアメリカの無声映画の話だったりした。全部理解はできないのに、ところどころをつまむように繋げて、ドキドキしながら聴いていた。父は生粋の江戸っ子だったから、語り口に独特のリズムがあった。今でも、仕事に疲れて、ぼーっと空を見ていると、耳の奥になつかしい声が蘇ってくる。

文字を読めるようになると、本の中のわかる字を探すのが楽しくなった。客間にあった本箱から、岩波文庫を引っ張り出しては開いた。ありがたいことに、その頃の文庫にはルビがついていた。それを頼りに、たどたどしく読んでいく。意味なんてさっぱりわからない。でも後年、その本箱を見ていたら、確かにこれ読んだ！　という本を見つけた。それはトルストイの『幼年時代』だった。小さな男の子が出てくるから読んだのだと思う。うっすらと、名前の音がおもしろかったのを覚えている。

本当に本のない時代だった。それでも、2年生ぐらいの時、友達に借りて『小公女』を読んだ。それは大変な感激だった。主人公セーラに自分を重ねて、波乱万丈の運命に胸をときめかせた。なにせ食べるものも充分ではない時代だったから、セーラの豪華な寄宿生活に目が眩み、でも一転、彼女が不幸になると、その落差の激しさに、怒りを覚えた。ほっぺたをかっかとほてらせて、息を吸うのも忘れて読みふけったことは、今も大事な思い出だ。

戦争が終わり、少し世の中が落ち着いてきたある日、叔父が「栄子に本を買ってきたよ」と言って一冊の本を渡してくれた。『ビルマの竪琴』（竹山道雄・著）――これが私の自分の本の第1号になった。家族の本でもなく、兄弟共有の本でもなく、友達から借りた本でもなく、私だけの本!!　この気持ちは格別だった。初めて開いたときの紙

の匂いまで覚えている。みかん箱を本箱にして、大事に立てた。

その後は、主に翻訳の本を読むようになった。『ハックルベリー・フィンの冒険』『宝島』『ロビンソン・クルーソー』そして、『モンテ・クリスト伯』を読み、物語の面白さに惹かれ、次は欧米のミステリーへと移っていったように思う。すでに中学生から高校生になっていたから、その頃評判のチャールズ・ディケンズ、サマセット・モーム、ウイリアム・フォークナー、フィッツジェラルドなどに夢中になり、子どもの本から離れていった。その間に素晴らしい児童書がたくさん出ていることも知らずに。

33歳のとき、ブラジル滞在の経験から、「ブラジルの子ども」について書く機会を得た。その頃から、書店の児童書コーナーに足を運び始め、綺羅星のように並んだ児童書の存在を知った。子ども時代にリアルタイムで読みたかった！　と歯軋りする思いだった。かつて『小公女』を読んだときのような、忘我の読書はもうできない。それでも、自分の子どもの時代を取り戻すように、読みに読んだ。作品に込められた作家の気持ちの動きを感じると、より一層面白さが深まった。

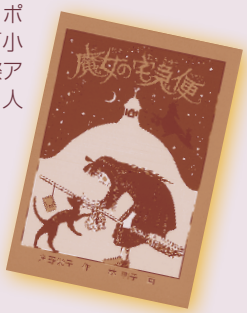
『トムは真夜中の庭で』を読んだときの衝撃は忘れられない。普通の暮らしの中で、こんなにリアルなファンタジーが描けるなんて！　トムの世界は、私が幼いころ、つぶやきながら描いていた、いたずら書きの世界と繋がっているような気がした。子どもの私は、道路に町を描きながら、時空を超えて、ここではない別の世界に行っていた。それは小さくてささやかな物語であったかもしれないが、物語の作者としての心の動きはピアスと同じだったと思う。

また、個性豊かな主人公たちにも魅了された。『長くつ下のピッピ』は、大人の私にとっても憧れの存在だ。自由で、たくましくて、面白くて、賢い！　なんてすごい女の子を、リンドグレーンは作り出したのだろう。多分、その根っこは、この作家の子ども時代にあるに違いない。そう思って、私は自分の子ども時代の思い出を追いかけ始めた。そして、思い出が、今を生きる力になってくれること、書く力になってくれることを実感した。

私は大人になってから児童文学と出会った。でもこんなふうに、時をあべこべにして出会って、作家としての命を与えられたと思う。まだまだ、書きたい作品がたくさんある。

かどの えいこ

東京・深川生まれ。大学卒業後、出版社勤務を経て24歳からブラジルに2年滞在。その体験をもとに描いた『ルイジンニョ少年 ブラジルをたずねて』で、1970年作家デビュー。代表作『魔女の宅急便』は舞台化、アニメーション・実写映画化された。産経児童出版文化賞、野間児童文芸賞、小学館文学賞等受賞多数。その他、「アッチ、コッチ、ソッチのちいさなおばけ」シリーズ、「リンゴちゃん」「ズボン船長さんの話」。紫綬褒章、旭日小綬章を受章。2016年『トンネルの森1945』で産経児童出版文化賞ニッポン放送賞、18年3月に児童文学の「小さなノーベル賞」といわれる国際アンデルセン賞作家賞を、日本人3人目として受賞。



トライホークスの本

魔女の宅急便
著者…角野栄子
画…林 明子
福音館書店　1,650円
✧全6巻

夢中になって読んだ本

トムは真夜中の庭で
著者…フィリパ・ピアス
訳…高杉一郎
岩波書店　2,090円

長くつ下のピッピ
著者…
アストリッド・リンドグレーン
訳…大塚勇三
絵…桜井 誠
岩波書店　1,870円

まざあ・ぐうす＊
訳…北原白秋
絵…スズキコージ
復刊ドットコム
6,050円

＊印は、角野さんが選んだタイトルをもとに、現在入手できる本を編集が選びました。

- **忘れ川をこえた子どもたち**
  著者…マリア・グリーペ　訳…大久保貞子　冨山房　品切重版未定
- **トンカチと花将軍**
  著者…舟崎克彦、舟崎靖子　福音館書店　品切重版未定
- **トム・ソーヤーの冒険 上下**＊
  著者…マーク・トウェイン　訳…石井桃子　岩波少年文庫　上814円・下792円
- **Sunny I**　著者…松本大洋　小学館　996円　✧全6巻
- **少年時代I マルセルの夏**
  著者…マルセル・パニョル　訳…佐藤房吉　評論社文庫　1,100円
  ✧全3部作
- **時の旅人**　著者…アリスン・アトリー　訳…小野 章　評論社　1,760円
- **少年動物誌**＊
  著者…河合雅雄　画…平山英三　福音館文庫　770円
- **モンテ・クリスト伯 上中下**＊
  著者…アレクサンドル・デュマ　編訳…竹村 猛　岩波少年文庫
  上880円・中924円・下968円

SINCE 2001
山猫だより

企画展の本を紹介します

新しい企画展示「未来少年コナン展」が始まって2ヶ月が過ぎました。今回、50～60代の方が熱心にご覧になっていらっしゃる姿をよく見かけます。リアルタイムで「コナン」を観ていた世代の方々です。「コナン展を観るために初めて美術館に来た」という方も多く、「コナン」への熱い思いをひしひしと感じます。

企画展示では立体の展示物や映像、全26話の作品紹介もあるので、「コナン」を見たことがなくても楽しんでいただけると思いますが、今回は現在出版されている書籍の中から、「未来少年コナン」をもっと知ることができる、楽しむことができる関連書籍を4冊ご紹介したいと思います。「コナン」を目指して来館された方にとっては、すでにご存じの本もあると思いますが、新たに「コナン」に出会った方たちに、こんな本もあったのかと手に取っていただけたらと思います。

『ロマンアルバム 未来少年コナン』
現在出版されている本の中で、コナンの情報が一番まとまっています

前号でも紹介しましたが、ロマンアルバムシリーズは、豊富なビジュアルやテキストで作品をよく知ることができる一冊です。この本では、各ストーリー、登場人物や設定が、場面スチルとイメージボードとともに紹介され、全26話のスタッフリストやテレビアニメのオープニング、エンディングも楽譜付で掲載。宮崎監督が語る作品の基本設計も必見です。

「コナン」のロマンアルバムが出版されたのは1981年。編集後記を読むと、編集者のこの本や作品にかける熱い思いが伝わってきます。

ロマンアルバム
未来少年コナン
徳間書店　2,750円

『また、会えたね!』
コナンとラナの物語

徳間書店アニメージュ文庫の一冊です。コナンとラナの心のふれあいを名セリフと名シーンで綴り、全26話を紹介しています。場面スチルとともに、宮崎監督のイメージボードも多数掲載されています。コナン放映の半年後に行われた監督のインタビューも「宮崎駿『コナン』を語る」として収録されており、「漫画映画」とは何か、登場人物や設定についても詳しく語られています。コナンとラナの物語と作り手の宮崎監督の言葉がぎゅっとつまった一冊です。

また、会えたね!
編…富沢洋子
徳間書店
アニメージュ文庫　880円

『作画汗まみれ 改訂最新版』
日本のアニメーション史ともいえる一冊

著者である大塚康生さんは、作画監督として「未来少年コナン」の制作に参加しています。幼い頃から絵を描くことが好きだった大塚さんは、一度は厚生省の麻薬取締官事務所で働いていたものの、絵で生計を立てたいと志し、アニメーターとなります。東映が漫画映画を作るために東映動画を立ち上げた頃であり、そこで若き日の高畑、宮崎両監督と出会い、数々のアニメーション制作に携わります。大塚さん自身の仕事とその仕事を通してのアニメーション業界、アニメーターとは、絵を動かすこと、アニメーションを作るということについて、様々に語られている本です。「未来少年コナン」の制作に参加した経緯や、大塚さんからみた宮崎監督、当時の制作の状況が第7章にまとめられています。

もとは「月刊アニメージュ」(徳間書店)に1981年3月号から82年2月号まで連載されており、その後、アニメージュ文庫として刊行され、2度の改訂を経て本書となりました。

作画汗まみれ 改訂最新版
著者…大塚康生
文春ジブリ文庫　869円

『出発点1979～1996』
宮崎駿監督の企画書、演出覚書、エッセイ、講演と対談90本を収録

「アニメーションを作るということ」「しごとの周辺」「人」「本」「好きなこと」など、テーマ別に収録されています。「未来少年コナン」に関しては、アニメージュ文庫『また、会えたね!』と同じインタビュー「『コナン』を語る」が掲載されていますが、複数の企画書を一度に読むこともでき、アニメーション以外のことも触れられて、宮崎監督が思ったこと、考えたことをこの一冊で追うことができます。

出発点1979～1996
著者…宮崎 駿
徳間書店　2,860円